

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Basket working in Japan (2) : Kantō Area

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 俊亀智 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004621

関東地方タケカゴ細工の展開

—— 日本列島におけるカゴ細工の諸系列 (2) ——

中 村 俊 亀 智*

- | | |
|----------------|--------------|
| I. 問題提起 | 3. 埼玉県大里郡寄居町 |
| II. 5つの事例 | 4. 東京都町田市中宿 |
| 1. 群馬県利根郡月夜野町師 | 5. 埼玉県秩父郡野上町 |
| 2. 千葉県夷隅郡大原町深堀 | III. 若干の考察 |

I. 問題提起

関東地方のタケカゴ細工は、東北のタケカゴ細工が素材の異なる3つのカゴ細工の流れ（ネマガリ・シノ・マダケのカゴ細工）によって区切られているのに対し、おおむね、マダケを素材としたタケカゴ細工の展開としてとらえることができる。関東地方のカゴ細工は、マダケをいかした、^{はば}巾のひろい^{かわだけ}皮竹や^{みだけ}身竹を利用した大型のクズハキカゴ・ショイカゴ・養蚕につかわれる各種のカゴの盛行によって特徴づけることができる。

その有様は、数こそすくないけれども、NME（国立民族学博物館 National Museum of Ethnology の略）所蔵の資料によってうかがうことができよう。NME所蔵の標本には、廻し竹に巾2ないし3mmの皮竹を用いた^{ともがち}共縁の^{ざるめあみ}箆目編の背負カゴや底すばまりの箆目編の背負カゴもみられるが〔文部省史料館（以下文史という）1968: 8, 12〕、箆目編のカゴの外側に大きな6つ目のカゴをかぶせた、いわゆるクレコミの背負カゴ〔文史 1968: 8〕や6つ目のカゴの目を巾25mmの身竹でふさいだ目潰しのカゴ〔文史 1968: 8〕が印象的で、小さいものでは、丈夫な、量感のある東京湾の海苔洗いザル〔文史 1968: 36, 50〕、コメアゲザル〔文史 1968: 50〕、ミソコシザル〔文史 1968: 50〕、まるいオカメザル〔文史 1968: 56〕、やや荒い^{つく}作りのカゴでは、6つ目の野菜カゴ〔文史 1968: 76〕やカズギカゴ〔文史 1968: 78〕などをあげることができる。

それなら、関東地方のタケカゴ細工は、手法のうえで、どのような基礎の上に、そ

* 国立民族学博物館第4研究部

して、どのような生産・生活と結びついて、育てられてきたのだろうか。小文は、最近の採訪の結果をもとにして、この点を追ってみたものである。

今回もまた、以下のまとめにあたって、次の原則をまもることにした。

1 採訪にゆくまえ、図録 [文史 1968] を検討し、そのなかから関東地方のカゴ細工についての資料をえらびだし、そのうち特徴的なカゴについての記事を手掛りにして、所用地を確かめ、現在でもカゴを作っておられる方々、またはごく最近までカゴを作っておられた方々をたずね、

- a 材料はどのように用意されたか
- b カゴはどのように作られたか
- c どのようなカゴが作られてきたか

の3点を中心に、お話をうかがい、その結果を聞き書の形にまとめ、聞き書を引用する形で、この小文をまとめた。

2 これらのお話は、論文における引用とまったく同じように、いちいち、話に同席して下さった方々の名前もいっしょに、註記して根拠を明らかにすべきであるが、いろいろ考えたすえ、小文では一切本文中には個人のお名前はださないことにした。しかし、聞き書をまとめる過程で書きちがいや思いちがいがあつたときには、すみやかに訂正させていただきたいと思う。

3 この小文では、技法についての聞き書を引用するだけでなく、たとえそれがその土地のカゴ細工の代表的な例でないにしても、聞きとりを確かめ、理解するために、自分がつかえるようなカゴを買ってきて、しばらく手元において使い、また作り方を観察し、その印象をつきあわせてみた。実際にカゴを作っておられる方々と、博物館の資料の整理から出発したわたしたちとでは、カゴの見方も自ら当然異なるかもしれないが、このようにして、これまで気付かれずにいた点をできるだけ掘りおこそうとつとめた。

4 カゴ細工の用語は必ずしも一定していないが、ここではごく簡単に、カゴを作る過程については底編^{そこあみ}・胴編^{どうあみ}・縁仕上げ^{ふちしあげ}、それに底編から胴編へうつる過程の腰立ての4つを区別し、タケ作りの過程では、タケを所定の長さに切り、それを縦割(唐竹割)する過程、それをさらに細かく割る小割^{こわり}、タケの厚さをそろえるタケ剃ぎの4過程を区別した。カゴを編む材料としてのタケには、皮竹^{かわだけ}と身竹^{みだけ}をわけ、6つ目や箆目で水平方面にいれてあるタケを廻し竹^{まわしだけ}、タテ方向にいれられているタケを立竹^{たちだけ}ということにし、補強のためいれる丈夫なタケを力骨^{ちからぼね}とした。編み方には、4つ目編^{よつめあみ}、6つ目編^{むつめあみ}、網代編^{あじろあみ}、箆目編^{ざるめあみ}、市松^{いちまつ}、それに目を廻し竹の仲間であみくじ^{あみくじ}、目をややあける目透き^{めす}、縁仕上げについては、縁巻き竹^{ふちまきだけ}をつかって縁をかがる巻口仕上げ^{まきぐち}、蛇腹巻き^{じやばらま}、それに野田口仕上げ^{のだぐちしあげ}、縁巻き竹をつかわず立竹同志を組合せて縁をつくる共縁^{ともがら}などの用語をつかうことにした。箆目編に6つ目をかぶせるカゴの編み方を、ここでは、

くれこみということにした。なお、小文ではザルもカゴも、ひとまとめにしてカゴとよぶことにした。

5 地元での呼び名は、従来の慣例にしたがって片仮名で表記し、聞き書からの引用には*をつけて拠りどころをあきらかにした。

6 関東地方のタケカゴ細工では、以下にとりあげたもの以外、どうしても伊豆七島のカゴ細工について触れねばならない。しかし、それについては昔まとめたこともあり [中村 1969: 309-312]、南西諸島のカゴ細工との関係も問題にしななければならないので、ここでは触れないことにした。また、関東地方のタケカゴ細工の展開を考える場合、近郊農業と結びついた野菜出荷用のカゴ細工についても是非問題にしななければならないが、どうしたわけか、今回の採訪では寄ることができなかったで、別の機会に、あらためて確かめなおすことにしたいと思う。また、家庭の台所用のザルやカゴについても、ここでは時間的にとりあげられなかったので別の機会をまちたい。

II. 5つの事例

1. 群馬県利根郡^{つきよのまちもろ}月夜野町師

a. 材料はどのようにして用意されたか

関東地方は、おおまかにみて、関東平野とそれをとりまく周囲の山地の地帯、そして海岸地帯の3つにわけてみることができる。そのうち山間の地帯では、どのようなタケカゴ細工が行われていたのだろうか。

月夜野町は人口 11,000、面積 70.8 km²、この地方の中心地の沼田市から町の中心までは約 6 km、町の中心から上越国境までは約 25 km の場所にある。町のまんなかを利根川と国道291号線がはしり、その両側の標高 400 m から 55 m にかけて、段丘のうえに聚落がいとなまれ、水田が階段状にひらかれている。

ここではカゴ細工にマダケがつかわれている。「材料のマダケには、縁巻きにつかう1年目のシンコ以外、3年から6年までのものが適している*」という。毎年9月から冬至までのあいだに切ったタケは年中つかえるといって、そのあいだに切りたてしておく。タケ切りには竹籤から1本1本選んで切ってくるのと、まとめて束にして買う場合とがあり、タケの1束は昔は9本で、下から3節目の周囲の長さによって、30.3 cm は1本1束、27.3 cm もので1束1本に 12.1 cm のものを1本つけ、24.2 cm のタケで1束2本の割で束ねてくる。

ここでは、立竹をツクリダケ、廻し竹をオビダケと呼んでいる。キノハカゴでは、立竹に4ヒロ半の長さのタケを15本ないし18本用意する。廻し竹は長さ6ヒロ半で5

本用意しておく。「タケの長さはすべて身体で計り、とくに物差はつかわない*」。

カゴをつくるときには、用意しておいたタケをタケツポナタ（鉋）で2つに縦割にし、立竹は 12 mm の巾に、廻し竹は 13.6 mm の巾に小割してゆく。そのおのおのを皮と身の部分に剥ぎわけ、「身竹のほうは全部燃料にして、もやしてしまう*」。

b. カゴはどのようにして作られたか

キノハカゴは、口の直径、胴の高さとも 66.7 cm の6つ目のカゴである。これを編むには、はじめ、立竹を2本、目分量で平行にならべ、それに交叉するように、ななめに立竹を加え、順に6つ目を構成してゆく。最初の6つ目のうえに足をのせ、コシをかがめながら順次身体の方向をかえ、鉋でタケ同志の目を締めながら作業をしてゆく。

底編がおわると腰立てにかかる。「ツクリダケを見見当でたわめておき、2本とび2本とびの要領で、いちばん下のオビをかけ、ツクリダケをとめてしまう*」。いちばん下の廻し竹には巾のせまい丈夫な皮竹がつかわれる。「ツクリダケ15のときは底まわりに5角と6角の目が順にならぶ。ツクリダケ18本ときには6角の目が2つずつつき、それに5角の目がひとつはいることになる*」。

廻し竹は3廻しし、端を切りおとす。

縁まできた立竹は最上段の廻し竹をこえたところでまろく撓め「出会った立竹にはさみこみ、途中ツクリダケと同じようにオビにからませながら、そのまま底までおろしてゆく*」。縁まできた立竹には、右むきのタケと左むきのタケとがあるが、実際には「はじめに右むきのタケだけを手前に曲げておき、そのあと残りの左むきのタケを反対側に曲げ、それぞれ出会ったツクリダケに合せてゆく*」。その結果、「ツクリダケは、隣のツクリダケを1本こえた、2本目隣のツクリダケにさしこむことになる。出会ったタケをはずし、つぎの山のところへ重ねてゆく*」。こうした縁作りのことを、ここではヒッケエシ（引返し）といっている。

これに対し、「縁のところではツクリダケの先を細かくササラに割り、縁に巻きこみ、その両側に縁竹をあて、そのうえをシンコで3回巻く縁のことをマキブチという*」。ヒッケエシとマキブチでは、ツクリダケのタケゴセエ（竹ごしらえ）もちがいが、ヒッケエシのときには、ツクリダケの両端の 75.8 cm のところを薄く割り、タケがうまく重なりあいやすいようにしておく。こうしておく、編んでいるときタケの先が自由に動き、返すときにも細工しやすい*。「タケの先がこわいと、なかなか目にとおらない*」。

同じ利根郡のなかでも、2つの縁作りの分布がはっきりちがいが、「下の沼田市ではマキブチ、山手の水上町ではヒッケエシ、月夜野町はちょうど中間なので、師のカゴ屋は両方へ仕事にいていたから、両方の縁のカゴがつかわれた。峠むこうの新潟ではアワセブチといって*」、野田口仕上げのカゴがつかわれた。

カゴ作りで、「いちばん難しいのはコシタテで、第1のオビ（最下段の廻し竹）、第2のオビをいれるときが、とくにむずかしい。2のオビが上へあがりすぎると口が開いて不細工な形になってしまう。左手でオビが逃げないようにおさえ、右手の小指の下でオビをおさえながらツクリダケを動かして目をこしらえてゆく*」。この手加減がたいへん難しいという。

引返し型の6つ目のカゴの編み方を手元の標本について確かめると、これは、ありあわせのタケを割って即席に見本にこしらえてくれた、口の直径 11.8 cm・高さ 11 cm・重さ 55 g のカゴで、立竹も廻し竹も巾 6 mm の皮竹で、それを 3 cm の間隔にならべて6つ目を構成しているが、おおよそ次のようである。このカゴでは底編の6つ目の数は5列で、まんなかの6つ目の数は3つで、端にゆき次第目は1つずつ減ってゆくから、底の目の数は全部で9個となる。胴の廻し竹は上下の縁の廻し竹までいれて3本で、縁は立竹同志の組合せでつくられる。底から出発した立竹は縁で撓められ、出会う相手のタケといっしょに再び胴を下り、底へおり、底を横ぎり、また胴へでて縁で曲り、胴をおりて底の竹となるといった経過をたどる（附図7）。

いま、立竹の軌跡をたどってみるために、底の竹配りを図1aのように写しとり、また、縁にそってできている立竹の曲り目（いわゆる「山」）を点であらわし、そのおのおの12個の点に時計の廻りと同じように番号をつけ、底の縁の番号は1, 2, 3, 縁の番号は一, 二, 三で示すとすると、このカゴでは、立竹は次のような2組の閉じた回路（ループ）によって配線されていることが確かめられる。

[{1, 三, 5, 8, 十, 12, 5, 七, 9, 12, 二, 4, 9, 十一, 1, 4, 六, 8}: A]

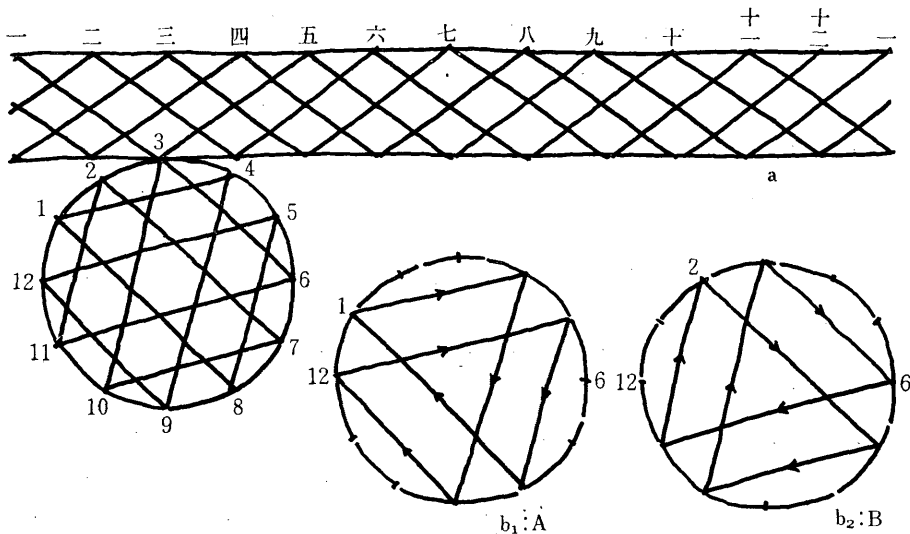


図1 キノハカゴの立竹配り

{2, 四, 6, 11, 一, 3, 6, 八, 10, 3, 五, 7, 10, 十二, 2, 7, 九, 11, 2} :B]

このことから確かめられるように、底を出発した立竹は、出発点から数えて2つ目の上の縁の曲り目をとおり、2つ目下の底の点（出発点から数えて4つ目の頂点）にはいり、図1bの竹配りで底編を形作ることがわかる。A, Bそれぞれが底で通過する点を結んでみると図1bのような1筆書の図形がえられる。引返し型の縁作りのカゴには、廻し竹の本数、立竹の登り具合によって別の竹配りの型が、いくつかあることが知られている。

c. どのようなカゴが作られてきたか

月夜野町はその45%が山林原野で、そのうち67%が国有林によって占められている。そのほかは個人持^{こじんもち}の山林だが、そのほか18%を占める共有林がのこされている。田は全域の5%、畑は12%で、農産物のうち最も産額の多いのは、現在でも養蚕による収入で、粗生産額の34.6%にあたり、コメの17.9%を2倍ほど上まわっている。1955年には農業に従うひとたちの割合は就業人口の70%であったが、1970年ではほぼ半分になり、それにかわって、第2次産業の比重が10.4%から21.2%、第3次産業の割合が19.2%から29%に急増している。こうした土地柄から想像できるように、昔は共有山から夏草や冬の落葉をとってきて厩^{うまや}にいれ、厩肥^{うまやごえ}をつくり、それを田にいれ、農閑期には街道^{だちん}の駄賃^{だちん}つけや運搬などにウマを利用し、田仕事のあいまに養蚕によって現金を得る生活がおこなわれたにちがいない。

昔は「どこのムラにも1人や2人はカゴ屋がいて、春から夏にかけて田仕事や養蚕をし、農閑期の12月から春先4月まではツボまわりといって利根郡一帯の村々のお得意をまわってあるいた。材料のタケを用意しておいてもらい、材料むこう持ちで、手間で仕事をしてまわった*」。『使う人がみているまえで仕事をするのだから、いちばん堅い仕事をしなければならなかった*』。こうしたカゴ屋さんたちが、夏草刈りや落葉かきのための大型の6つ目カゴ、そして、各種の養蚕のためのカゴをこしらえた。

「稲刈がすんで12月にはいると、山の落葉かきがはじまる。ワラをもってゆき、木の葉をそれに包み、直径45.5cm・長さ91cmの束をこしらえ、2束半ずつウマにつけて運んでくる。また、1束半ずつキノハカゴにいれて運んだ。それを厩肥にし、ウマの両側につけたビクにいれ、10a当り13ダンから15施した*」。キノハカゴは直径、深さとも60cmの6つ目引返し縁のカゴ、クサカリカゴは廻し竹が12本はいった直径67cm・深さ82cmの6つ目引返し縁のカゴで、5月・10日頃から彼岸すぎまで、夏草を刈って運ぶのにつかわれた。

「田植は6月20日前後、稲刈は10月半頃で、田植前後は春蚕の時期、中蚕は7月20日頃から、稲刈前8月20日から9月はじめまでが晩秋蚕の時期になる*」。ザマといって、直径48.5cmから78.8cm、深さもほぼ同じくらいのくれこみカゴがクワの葉をとってくるのにつかわれた。このカゴは、「箆目のカゴを編んでおき、その外側に

6つ目のカゴを着せたもので、底にトメダケという竹を1本いれ、イチバンオビをしめる。縁はマキブチだが、ザルのツクリダケの先が縁のなかにはいるように折りかえし、6つ目のカゴのツクリダケの先はササラに割り、両側に縁竹をあて縁巻き竹をまく*」。

ザマにいれて運ばれたクワの葉は土間のクワオキバにおき、ツボザル、またはハンザルに移して蚕に与える。ツボザルは直径 39.4 cm の「胴返し」のカゴ（カゴの直径と深さとの値がほぼ等しいカゴのこと、この辺りのカゴの基本の形は「胴返し」だという）で、底の中心が網代編の箆目編のカゴだった。このほか、巾 90.9 cm・長さ 176 cm を標準にしたカイコカゴ（これをホンカゴという、6つ目引返し縁）や口径 53.0 cm・深さ 86 cm の6つ目で巻口仕上げのマユカゴなどが作られた。

「カイコの飼育法がかわり、それまでの棚飼からクワの葉を枝のまま与え、土間の上でカイコを飼う^{じょうそういく}条桑育になったので、カイコカゴはいらなくなり、化学肥料が多かつかわれるようになったので厩肥や堆肥をつくるひとがすくなくなり、ウマやウシもいらなくなり、山の落葉かきも誰もしなくなってしまったので*」、およそ10年前から、カゴを作るひとは、この辺りではほとんどいなくなってしまうという。

2. 千葉県夷隅郡大原町深堀

a. 材料はどのようにして用意されるか

NME 所蔵の資料には「背負運搬具コレクション」として130点の標本が国の重要民俗文化財に指定されている。そのなかに旧夷隅郡^{なみのなむらいわぬ}浪花村岩船（現大原町岩船）で採集された形のよいショイカゴが含まれている。その形の面白さにひかれて、このカゴの故郷をたずねてみた（附図3）。

大原町では、カゴの材料には「マダケとモウソウがつかわれた*」。しかし、モウソウは細工がしにくいので、マダケのほうが多くつかわれた。ここでは縁巻き竹につかわれる1年目のシンコのほかは、かえて「2年以上たったタケが適している*」といい、「材料のタケは、まとめて、タケ屋から買った*」。材料のタケは、目の高さの周囲の長さ（目通り）が 167 cm の太さのもので約 8.1 m の長さに切っており、周囲 21 cm もので3本1束、24 cm もので2本1束、30.3 cm もので1束1本の割合にまとめられ、仕事場に運びこまれた。タケは「山の壁土に生えたタケのほうが^{かべつち}平場のタケよりネバリがある*」^{ひら}とあってよろこばれた。

ここでは立竹をツクリダケ、廻し竹をマワシと呼んでいる。

買っておいたタケは、カゴをつくりはじめるとき、ショイカゴなら、立竹は 151.5 cm、廻し竹なら 4.55 m ほどの長さに鋸で切り、鉋で4つに縦割にし、立竹は巾 2 cm、廻し竹は巾 6 mm くらいに小割にしておく。

それを立竹も廻し竹も4枚に剥ぎ、4枚に剥いだタケの皮竹と、皮のすぐ下のタケ

だけをのこし、3番目はごく安いカゴの類に、そして、最後の身竹は燃物にしてしまう。ここでは、皮竹か、質のよい厚い身竹だけが素材としてつかわれる。竹剥ぎには薄い両刃の鉋がつかわれ、オシザキ（押し裂き）と、足をつかって作業するアシザキとの2つのやり方が行われている。

b. カゴはどのようにして作られるか

底編には2つの型がある。「町でつかうショイカゴは、長さ27cmの厚い張りダケを、まず1本おき、その両側に2本の作りダケをならべ、それに7本の作りダケを直角に重ね、さらに張りダケと同じ方向に作りダケを2本ずついれ*」、市松に編む。これに対して、「浜や在では、最初に張り竹を十字型に重ねあわせ、それがX字型になるように作り竹をかけ*」、作り竹で張り竹をとりくみながら、4つ目編の底を完成させてゆく。張りダケは、厚さ3mmほどの皮竹で、力骨の役目をし、張りダケをいれつけないと、しばしば、腰立の過程で「コシがたたなくなる*」ものだという。

この地方のショイカゴは、口を直径45cm・高さ43.5cm・重さ1.55kgの筧目編で、底のタテヨコは口の直径の約半分の24cmほどで、底から胴の下の部分にかけて美しい曲線がみられる。この曲線部分をつくるには、いまでは型がつかわれているが、昔は、「3cmあがると差渡40.9cm、6cmあがるとそれより15mmふやし、15cmのところまで47cmになるように、それからしばらく同じ差渡で上ってゆき、口へいって44cmの開き具合になるよう、いちいち物差をあてて計りながら、こしらえていったものだ*」という。それで、型をつかえば1日3個できるが、昔のやり方では1日2個しかつくれなかった（附図19-24）。

この地方のショイカゴには、皮竹と身竹の使いわけで、帯状の文様が胴にみられるが、胴には「廻しに皮竹を7本、身竹を2本半つかい、1本で4回廻し、9段に帯をつけてゆく*」。

縁の仕上げにも2つの型がおこなわれている。外観はいずれも2重巻きの巻口仕上げであるが、下地の作り方がやや異なる。普通は縁までゆきついた立竹を最後の縁の廻し竹にからげて先を折りまげ、一段下の廻し竹にはさんで缺で切り、その内側にシタブチという身の竹、外側にホンブチとって皮竹の縁竹をあて、巾15mmぐらいの縁巻き竹で最初に右廻しに1つ目おきに（立竹1本おきに）縁巻きし、あいている目を同じようにもう1本の竹でかがり、その上から、皮竹を左廻しに巻いておさえてゆく。この種の縁仕上げのことをカエシブチとっている。もうひとつの方法は、立竹の先を長さ13cmほど、ササラに細かく鉋で割り、折れないように注意しながら、ちょうど竹縄でも編むときのように、立竹を双子に巻き、立竹の本体をかがり、その上に縁竹や縁巻き竹をカエシブチのときと同じようにそえて、仕上げでゆくやり方である。このやり方を、ここでは、ナワブチ（縄縁）とよんでいる。

こうして、ここでは、「何年もつかって底があがっても（底がこわれても）縁がと

縁ない*」、丈夫な縁のカゴがつくれる。それは浜の労働の必要から、おのずからそうなったのだという。「カゴでいちばん難しいのはタケを剣ぐことだが、縁とりができれば1人前、さらに、縁とりは誰でもとれるが、縁を丈夫につくるのは難しい*」。「カゴ編を習うのにも、はじめ底編を習い、つぎに廻しをまわすことをおそわり、最後に縁をおぼえる。そのあとでタケヘギをした*」。

このようなカゴ作りの様子を手元の標本についてみると、つぎのようになる。いま、口の差渡 47 cm・高さ 10.5 cm のナワバチという延縄漁のときにつかう浅い6つ目のカゴについてみると、立竹は巾 12 mm・厚さ 1 mm で、編み目の中心を形作る3方向の6本の立竹には皮竹が、残りはすべて身竹がつかわれている。立竹同志の間隔(6つ目の目の幅)は、かっきり 3 cm で、底の目の数は、まんなかの最も目の多い列のところまで9、それから1目ずつ減じ、隅の1辺の目の数は5だから全部で61となる(附図13)。

注意されたのでよくみると、6つ目と6つ目とのあいだにできる3角形の目が非常に小さく、そのため底編は手堅くすっきりとしたものとなっている。そうなるためには「作り竹の両側を巾 1 mm の割で軽く面をとり、作り竹同志、あらかじめ組みやすく、タケゴシライをしておく」。

胴の廻し竹は1本で巾 17 mm の皮竹がつかわれている。

縁は太さ 25 mm で、外観からははっきりわからないが、立竹は縁のなかに折りこまれ、その両側に、巾 15 mm 前後の縁竹がええられている。とくに外側の縁竹には、ていねいに面をおとした皮竹が入れられている。そうした下地が外からまったくみえないくらいに、巾 20 mm ないし 14 mm の丈夫な身竹で、はじめ右巻きにその上を巻き、さらにその上から巾 15 mm の身竹を左巻きに巻いて仕上げている。こうした太い縁作りが、スキなく組みあげられた底編の6つ目とあいまって、このカゴにたくましさを感じさせる結果となっている。

c. どのようなカゴが作られてきたか

人口 22,600 大原町は、海岸地帯と山手の台地の地帯とおおきくわかれている。海岸地帯は海水浴などでぎわう北半分の日在浦と南半分の岩場の磯地帯とからなる。八幡岬から岩船までの 6 km の岩場地帯は切りたったガケで、その前面に昔からよく知られた海藻とりのイソがひろがっている。漁港は大原港と岩船港で、1975年度の水揚は19億余にのぼるといふ。ここでの漁業は揚操と延縄、それに1本釣で、最近ではタイ漁に人気があつまっている。水揚量ではイワシがだんぜんおおく、15.6%、金額的にも20.9%で、イナダ(45.2%)、タイ(6.7%)などが主要なものである。しかし、岩船港だけをとってみると水揚の7.8%は藻草類で、金額的にはアワビ(36%)、イセエビ(56%)が大きな比重をしめている。台地の地帯では 100 m 前後の高台のあいだに水田がひらけ、それをとりかこむようにして町の全域の49%をしめる山林が

ある。田は耕地全体の82.4%で、現在でも農林業にしたがうひとたちの家数は町全戸の35.5%におよんでいる。農業では、水稻を中心に蔬菜栽培、酪農、養豚、肥育牛などをとりいれた水準のたかい農業がおこなわれているという。

こうした町の生産・生活の有様は、カゴ細工にもよく表われている。昔からよくつくられてきたカゴは約10種であるが、そのなかには浜でつかう漁業用のカゴと田畑作りのための農業用のカゴとが含まれる。

漁業用のカゴでは、いまでも船でイワシをいれる、ダンベという桶をいれる直径82 cm、深さ103 cmの6つ目目透き（これをここではメヒキという）のカゴ、桶にいれたイワシをすくいとる口径54.5 cm・高さ6 cmの6つ目目透きの洗いカゴ、イワシの水とりにつかわれる直径42.4 cm・高さ106 cm前後のドウカゴ、そのほか、魚をいれる直径54.5 cm・高さ54.5 cmのバンヨウカゴというカゴなども作られている。船ではまた、ヤツサカゴといって、イワシをいれる直径45.5 cm・高さ30.3 cmのカゴがつかわれている。

陸のほうでは、山林から落葉をかきあつめ、堆肥をつくるときのショイカゴという直径50.0 cm・高さ51.5 cm、廻し竹を10本入れた大きな6つ目カゴや、イモなどを天秤で背負ってくるときつかう直径50.0 cm・高さ21 cmの6つ目カゴ、そのほか、蔬菜出荷用の各種のカゴがつかわれる。

ショイカゴは「口の直径45.5 cmから47 cm、深さは42.4 cm前後で、農家をしているひとたちは堆肥をいれて運んだり、浜では3月末の口開から夏いっぱい、北は大原港から南は岩船まで、海藻採り（ホグロ、ノリの類）を女のひとたちがするが、海藻をとり、浜で干し、家に運ぶときショイカゴをつかう。町では市へゆくときなど、買物にショイカゴを背負っていった*」。「在と浜と町場ではショイカゴの形がすこしずつちがいが、在ではズンドウ型の（円筒型の）ショイカゴ、浜では口のすぼまった底のせまい、まるいショイカゴ、町では、ふくらみのすくないショイカゴがつかわれた*」。また、「在や浜のショイカゴは皮竹を身竹にまぜて編むが、町のは皮竹だけでみばえのよいようにこしらえた*」。別の話では、「ショイカゴは口が開いていると後へひかれる背負加減、口がすぼまった形だと、前へひかれるように感じる*」といわれている。

3. 埼玉県大里郡寄居町

a. 材料はどのように用意されるか

関東山系の東側、ちょうど山間から流れでた谷川が関東平野にそそぐあたりには、山間の村々と平野の村々とを結びつける、かなり大きな町並が形作られている。寄居町もそのひとつで、現在では国道140号線（熊谷甲府線）と254号線（東京小諸線）とが交叉する場所となっている。町並の南には荒川が流れ、その対岸には後北条氏のい

わゆる武州鉢形^{はちがた}の城跡がある。ここには、かつて60軒余のカゴ屋さんたちがいたが、いまでは2軒になってしまっている。

カゴの材料はマダケで、材料のマダケは荒川の左岸など、このあたりどこにでも容易に育っているという。「カゴにつかうタケは2年から3年のものがよく、縁巻きにはやわらかい1年目のシンコをつかう*」。竹伐りは秋で、そのあいだは戦争のように忙しくタケを切りためておく。「1日10束切ればよいほうだといわれた*」。材料のタケは根から3節目の周囲の長さで太さをきめるといふ。長さはほぼ9mで、9.1cmのものなら24本で1束、12.1cmで12本1束、18.2cmのもので6本、21.2cmのもので5本1束、以下同様に27.3cmのもので3本1束、30.3cmのもので1本（現在は1本半）1束にたばね、雨があたらないように台をして家の軒下などに置いておく。「そうすれば1年はかるくもつ*」。「タケは短く切るとハンパものがでるし、切口^{きりぐち}から乾いてきて割りにくくなる*」という。「タケは元と先とは固さがちがい、下から150cmあたりが割りやすく、その辺のタケならどんな素人にもたやすく割れる*」。

カゴをつくるときには、長いタケを鋸でくるめ、長さ40cm（刃の長さ26cm）の両刃の短冊型の鉋で割ってゆく、廻し竹は570cm、立竹はコシゴぐらいのもので91cmの長さにしておく。タケを割るときには、「まず2つに唐竹割（縦割）にし、割ったタケの切口のまんなかから、左右に所定の巾で小割にしてゆく。これをブガケといっている*」。小割で8つ割^{わり}、4つ割^{わり}などという。

小割にしたタケは鉋で6枚に薄く剥いでゆく。そのうちウチミ（内側の身竹）2枚は捨て、皮竹と、皮竹の下3枚をカゴ編につかう。

b. カゴはどのように作られたか

6つ目のカゴを編むには、「はじめ立竹を2本平行にならべ、それに2本の立竹をX字型にかけ、それを中心に6本ずつタケを廻してゆく*」。カゴにはそれぞれ規格があるが、「カゴの寸法は手加減できまってしまう。円筒型のカゴをつくるには目をみな同じ大きさに加減して編んでゆかないと、口のほうが底より大きくひろがり不細工な形のカゴができあがる。だから、胴では廻し竹の（イレコの）いれ方が難しい*」。

「6つ目で底の4角なカゴをつくるときには、コシをたてるとき、目くずしといって角にあたるところに5角の目をこしらえる*」。箕目編のカゴでは、「底の中心を網代^{あじろ}に編み、7廻^{ななまわ}してからコシダケにもってゆく。そのときタテとタテの間隔を平均して同じように開くのがコツである*」。

「鉋で剥いでタケをこしらえるのは3年もすれば誰にでもできるが、カゴをつくるのは難しい。なかなか自分の思うような形にできないものだ。カゴはひとつひとつ、どこか違ってしまう*」という。

縁の仕上げは原則として2重巻きの巻口仕上げで、これにはクミコミとササラブチ

の2つの型があるという。クミコミは縁まできた立竹を縁にそって曲げ、その内側と外側とに縁竹をあて、その上をシンコの縁巻き竹で2重に（下のタケは1つおきに、上のタケは2つおきに）巻く方式、ササラブチは縁からでた立竹の先を鉋でこまかくササラに割り、割ったタケ同志を編みあわせ、その上を縁巻き竹で2重に巻くものである。

いずれにせよ、こうしてできたカゴの縁は「10年つかっても抜けない。底が抜けても縁は抜けてこないという*」。

くれこみのようなカゴの場合には、内側のザルの立竹を縁のなかに折りまげ、それに外側のカゴの立竹や縁巻き竹をまいてゆく。

このようなカゴ細工を、秋にキノコ採りに肩にかけてゆくナガザルについてみると、このカゴは口の直径が 29.5 cm・高さ 30.5 cm・重さ 500 g の円筒型の箕目編のカゴであるが、全体として厚さ 1 mm の良質の身竹でつくられており、それが大ききの割にはこのカゴを軽いものになっていることに、まず気がつく。見た目には、ずいぶん深いザルに見えるが、計ってみると口径と高さとはそれほど値がかわらないことがわかる。底の中心は網代編で、2つ飛び2つ潜りで編んでゆく。立竹は巾 5 mm、廻し竹は 3ないし 4 mm で、底の中心部から7廻りを経て、コシダテの終る胴の下から 6 cm までの部分には巾 2 mm の丈夫な細いタケが廻し竹につかっている、とくに胴の下 6 cm のところには皮竹が用いられている。胴はこまかい箕目編で、途中、下から 15 cm と 18 cm の2ヶ所に皮竹をいれ带状の編み目をつくりだしている。底も胴も編み方はきっちりでいて、底から縁下までいれてある2本の力骨（巾 2 cm の皮竹）とあいまって、このカゴを丈夫なものにしている。厚い力骨がはいるので、底と口とを同じ寸法にしたのでは底のほうで力骨の厚さだけひろがってしまうが、よくみると、このカゴでは底をカゴの内側へへこませることで、この問題を処理していることがわかる（附図8）。

縁まで登りつめた立竹は、先を縁にそって折りこみ、その両側に幅 10 mm・厚さ 2 mm の縁竹（外側の縁竹は皮竹）をあて、その上から巾 15 mm の身竹を右巻きに巻き、その上にさらに 12 mm ほどの皮竹を左巻きに巻いて仕上げている。縁の巾は 17 mm・高さ 17 mm で、縁はやや細めにまとめられているように思える。山で動きやすいよう、このカゴは、紐を縁の下につけ、肩から脇にさげてゆくという。

このほか、この町のカゴ細工の特徴は釣りの道具としてのピクなどにいっそうははっきりみられる。そこには形・作りともに細かい配慮がなされている（附図6）。

c. どのようなカゴが作られてきたか

寄居町は現在人口 25,700、世帯数 5,954 で、町域の43.2%は山林、田は6.5%、畑は14.7%である。商店数は 555 で、いまでは第1次・第2次・第3次産業の人口がほ

表1 カゴの種類(埼玉県大里郡寄居町)

呼び名	標準	値 段	寸 法		作 り
			シ キ	深 さ	
1 シバハキカゴ(大)		4,000	75.8	75.8	6つ目, 2重巻巻口仕上げ
2 シバハキカゴ(小)					
3 クサカリカゴ		2,500			6つ目, 2重巻巻口仕上げ
4 マルザマ		7,500	42.4	60.6	くれこみ, 2重巻巻口仕上げ
5 カクザマ		3,800	45.5	60.6	
6 ヒラショウギ		2,000	136.4		
7 カメノコ		2,000	130.3		丸箕型のザル, 野田口仕上げ
8 マルショウギ		1,700	30.3		丸箕型のザル, 野田口仕上げ
9 マルショウギ(組)		4,500	30.3—42.4		
10 チリトリ		1,500	136.4		
11 ミソコシ		1,300	166.7		まるザル
12 コシゴ	1,500—3,500		181.8		市松の4角なカゴ
13 メカイ		1,400	37.9	30.3	4つ目のカゴ
14 コメアゲ		1,600	21.2		
15 ナガザル		2,100	27.3		円筒型の箆目編
16 2斗ザル		2,800			
17 カクカゴ		6,000	60.6		
18 アンコシ		2,800			
19 乾燥カゴ		3,300	75.8	106.1	
21 カイコカゴ(小)		1,450	97.0		
22 カイコカゴ(中)		1,600	121.2		
23 カイコカゴ(大)		1,750	151.5		

〔註〕 シキはカゴの底の最大巾のこと。底のまるいカゴなら直径のこと, 4角なカゴなら対角線, 楕円のカゴなら長径, 矩形のカゴなら長辺のこと。高さのほうはおおよそその寸法がきまっているが, つかい方によって加減してゆく。

ほぼ均等な値をとっているが(36.3:28.1:35.6), 1955年当時は農業にしたがうひとたちの割合が63.6%で農業に依存する度合が, まだ, ずっとたかかったことがわかる。畑作ではダイコン・ハクサイ・ネギの栽培がさかんで, このほか, キュウリ・ナス・ホーレンソウなどの作付が多く, 養蚕は現在でも1,500戸の家で行われている。そのほか町の統計によれば, 1974年4月から6月30日までに町を観光の目的で訪れた人の数は229,405人で, そのうち荒川などの釣りのひとたちが41,072人あり, それについて, ハイクや登山・花見の人たちの数が多い結果がでていて, 「自然を生かす観光」は, 近郊農業の振興や商工業の育成とともに, 町の重点施策にとりあげられているほどである [寄居町 1975a: 1-10]。

このような町の姿は, ほぼそのままこの町のカゴ屋さんの仕事に直接反映している。1975年9月8日寄居地区のカゴ屋さんたちが集って(といっても現在はまだカゴをつ

くらない人たちが相当数なのだが)カゴの価格を協定した値段表には、このあたりのカゴ屋さんたちが作るカゴとして25品目があげられている。そのなかには、秩父の大滝村のように、地元にかゴ屋がいなくなってしまったので、その分まで作っておくりだしているコシゴのようなカゴや、釣りの客、山菜とりのひとたちのためのレジャー用のカゴなどが含まれている。

生産のためのカゴとしては、冬、周囲の山林から落葉を集めてきて堆肥にするときつかうクズハキ用の、目の大きな6つ目カゴ(シバハキカゴ)、夏、堆肥にするため共有山から草刈りしてくるクサカリカゴ(6つ目の大きなカゴ)、コメやムギの収穫調整になくてならない丸箕型のザル、山仕事にもってゆくコシゴ、畑でイモなどいれる4つ目のメカイ、家庭の台所のカゴとしては、コメとぎザル・味噌こしザル・アンこしザルなどがあげられる。

昔さかんに作られ、いまではほとんど作らなくなったカゴには、直径 48.5 cm・深さ 2.72m の6つ目目潰しのマユカゴ、カイコカゴ、大中小3種のクワトリザル(差渡し 21 cm から 33 cm・高さ 35 cm 前後)がある。このあたりでは大正の末頃、カイコの飼育の方法が棚飼^{たながい}からクワを枝のままカイコに与える条桑育にかわり、マユの乾燥場ができたりして、これらのカゴがつかわれなくなり、ちょうどそれにかわって、夏にはキュウリカゴ、冬はハウレンソウや青葉カゴ、春先きはエンドウカゴなど野菜出荷のためのカゴ作りがカゴ屋さんたちの主だった仕事になったという。こうした野菜カゴは1965年頃、ダンボールがつかわれるようになるまで、ひきつづき作られたものだという。

Tさんのところでは、代々カゴ屋をやっていたが、作ったカゴは、町の通りに面した家の店頭でも売っていたが、小僧の頃から附近の村々をまわって売りあるいた。その範囲は、鉢形^{はちがた}・花園^{はなぞの}・男衾^{おおすま}・寄居^{よりい}・猪俣^{いのまた}など、半径約 5 km ほどの地域だった。昔はここでは「行商が満足にできなければ製造屋もできないといわれた*」。行商には売れる時期と売れない時期とがあり「11月から12月のボーナス期にかけては売れる時期、1月から3月までと6月は売れない時期、3月、5月もよく出る月*」だった。売れない春さきには養蚕のカゴなど作りためておき「3月から5月にかけて養蚕のカゴ、夏は筥^{うけ}や、魚とりのピクやブツタイ、10月にはキノコとりのコシゴ・ナガザルといった具合に、それぞれ季節によって売れるものの内容がちがっていた*」。こうして、Tさんの場合には市へはせず、もっぱら、行商と家の店先きでカゴを売ってきた。

4. 東京都町田市中宿

a. 材料はどのようにして用意したか

関東地方のカゴ細工の主流は、素材的にはマダケのタケカゴ細工とみることができ。しかし、すこし山間にはいれば、上越地帯でも丹沢山塊でも、そして多摩川の南

にのびる多摩丘陵でも、シノはそれほど珍しくないし、シノを生かしたタケカゴ細工が農村副業のひとつとして普及している。

シノのカゴ細工の材料には「今年でた箸ぐらいの太さのシノを*」つかった。「8月のお盆すぎ、多摩村や神奈川県丹沢山麓へ切りにゆき、1週間つづけてかよい、ひと冬つかうだけのシノを切ってくる*」。シノを切るにはカマで伐り、直径45cmぐらいの束にして車で運んだ。「シノは群生していて1.5mぐらいの長さのにびているが、シノキリを専門に商売にしたひとたちもいたほどだった*」。

運ばれてきたシノは、立竹なら42.4cmないし45.4cmの長さに押しギリ(クワの葉を切るのにつかう刃物)でまとめて切り、庖丁でタテ4つに割り、身をおとして、ヒネ(皮竹)だけをつかう。「ヒネヘギといって、口でタケのはじをおさえて割ぐ*」。シノは1本を3等分するとして、もとの3分の1をオヤ(親)、その上をナカゴ、先の3の1をナカといい、それぞれカゴによってつかいわけする。「オヤはいいカゴをつくるときの材料にした*」。

b. カゴはどのようにして作られたか

このあたりで、昔からさかんに作られていたのは、立竹の間隔が8mmぐらいの、目の小さい6つ目のカゴである。「いちばん大きいのはタテ(立竹)24本のザル、つぎが22本、18本、16本というように2本ずつ立竹をへらしてゆく。廻しはカゴの深さによって、5つ廻り・7つ廻りなど、順に廻し竹をふやしてゆく*」。

こうして縁まで編んでくると「立竹の先をまげ、とっておいたナカゴやナカをそれに加え、フチアテといって、指ぐらいの太さのシノを縁にあて、その上からフチマキというタケを3つ目とびで巻いてゆく*」。

「カゴの商品価値は、底の編み具合と縁まきできまってしまう。ヒネが波うたずに、まっすぐとおるように、6つ目をきちっと編むのがシノのカゴをつくるときのコツである*」。

シノ細工を習うときには、はじめシノ割りをやり、そのつぎに、身と皮とをよりわけするヒネヘギをおぼえ、それから底や胴の編み方を教わる。最後に縁の仕上げをさせられる。

「昔は、1軒の家で、女のひとでも子供たちでも、ヒネヘギはヒネヘギだけ専門にカラダ(カゴの本体のこと)をつくるひとはカラダばかり、仕上げは仕上げで、それぞれ作業を分担してやったものだ*」。また「家によって、シノワリとヒネヘギだけを専門にやる家、編む作業をやるひとは編むだけ、仕上げは誰それというように、家々で仕事を分担し、商いのひとたちが廻ってあるいて、そのあいだをつなげた(分業を結合した)ものである*」。それでも、「上手なひとのそばにいて、仕事をみてもらって、ひと冬本気にやらなければ、うまくできるようにはならなかった*」。

ここでは、もうシノのタケカゴを作るひとはほとんどいなくなり、作ったカゴもほ

とんどみられなくなってしまったので、同じ多摩丘陵で作られたという小さなザルによって、シノのカゴ細工の実際に当てみよう。このカゴは口の差渡し 19 cm・高さ 5.5 cm・重さ 45 g の 6 つ目のカゴで、立竹にも廻し竹にも巾 2 ミリほどの薄い皮竹がつかわれている。タケとタケとの間隔は 7 mm 前後で、底の縁廻りには巾 3 mm の身竹を廻し、それに巾 4 mm の皮竹を巻きつけてカゴの本体にとめている。底から胴にかけて巾 10 mm・厚さ 2 mm の皮竹を水の字型にいれて力骨にしている。縁は太さ 12 mm で、立竹を折りこみ、それに若干つめものがしてあるらしく、その外側に巾 8 mm のやや身の厚い身竹を当て、その上を巾 6 mm の薄い皮竹で巻いて巻口仕上げの方式で仕上げている。底の目は、いちばん多い列で 19 目、底廻りの 1 辺の目の数は約 10 目、簡単に計算してみると 271 目という勘定になる。底などは力骨がなければ、とても、もつまいと思われるほど柔軟である（附図 10, 16）。

c. どのようなカゴが作られたか

明治のはじめの記録によれば、現在町田の市域に含まれている地域では、小丘陵がそこここにあり、そのあいだを縫うようにして小川が流れ、小川にそって水田が開けていたが、川は水量にとほしく、ひでりや洪水の心配がたえず、土性は黒壤土・埴土で、イネ・ムギ・アワ・ヒエ・クワ・茶などの成育には適するが、野菜にはむかず、このあたりのひとたちは、周囲の山から炭焼や薪取りで収益をあげ、藁作り・ワラジ縄作りをし、駄賃つけや養蚕・糸引きなどを副業にして、ようやく暮らしを支えた様子が書かれている [町田市 1976: 69-71, 93-95]。

町田市は多摩丘陵の南側に位置しているが、この丘陵を南北に抜ける国道 16 号線（八王子・府中・横浜方面）や鎌倉街道・鶴川街道などがこのあたりをよぎり、町田市から横浜までは直線距離にして 20 km ほどでゆきつく。

中宿で昔つくられたシノのカゴはジョウメドといって 5 つ入れ子の、6 つ目のメカイだったという。「いちばん大きいのは 36.4 cm で、60 枚 1 組で東京や横浜に出荷され、暮の魚屋や豆腐屋の景品につかわれた。暮が需要期なので、毎日注文がきて忙しかった*」。

ジョウメドは「入れ子なので 5 つが 5 つとも、透き間なく重なるように作るのがむずかしい。それで、ジョウメドには、1 本のシノでも親の部分のように、いちばんよいところをつかった*」。また「オオヒラはやや雑なザルで、30 枚 1 組、60 枚 1 本で出荷した*」。

5. 埼玉県秩父郡野上町

a. 材料はどのようにして用意されるか

埼玉県上野上青年の家では、毎年ひらかれる青年指導者の研修会の最終日を、地元の青年のひとを講師にして、この地方で昔から伝えられているショウギというカゴを

作る実習にあてている。カゴ細工はタケ剥^むの工程がすぐには誰にでもできないため、講習会の題材などには難しさをともなうが、このカゴ細工はタケを剥がずにカゴ編ができるので、この実習は教えるひとにも、教えられるほうでも、毎年好評に終わっているという。

材料はこのあたりでササとよばれている細いタケで、学名はオカメザサだという。このササは傾斜地の土どめなどにもってこいで、山間では家の裏の土どめに栽培しているところもある。カゴの材料は、今年でた1年目のものがつかわれる。「直径5mmくらいの10節前後のものがよく、長さは2mほどである*」。カゴをつくる日の朝、鎌で刈りとり、まだ葉がおおあおとしていううちに葉やハカマを素手でむしりとり、幹だけにしてしまう。普通は「まえの日に刈っておいて、夕方葉をこぎ、つぎの日に編む*」。

b. カゴはどのように作られたか

葉を落したササのなかから、まっすぐで同じくらいの太さのものを8本選びだし、80cmの長さに切りそろえる。切りそろえるといっても刃物をつかわず、素手で折りとるのである。かるく揉んで折ると、たやすく先はとれてしまう。それを2本ずつ1組にし、まず2組を十字型に重ねあわせ、その上にさらに2組を重ね、4組が米字型になるようにおき、別に太さも中位でやわらかいものを1本とりだし軽くまげてクセをつけておき、米字型の立竹の1筋の下にさしこみ、1筋おきに右廻しに、渦巻型に立竹にからげてゆく。これが廻し竹のはじめのタケとなる。このとき片ヒザをつき、底の中心をおさえながら身体を廻して廻し竹をいれてゆく。最初の1本の廻し竹を廻しおえたら、いままでの編み目全体を裏がえし、左廻しに廻し竹を1本だけいれ（結果的に表からみるとこの廻し竹も右廻しとなっている）、あとは裏がえししたりせず、立竹の間隔を手で加減しながら、^{たごあな}双子編のやり方で立竹に廻し竹をかけてゆく。これは底の面をたいらに編むための工夫のようである。「廻し竹をからげるのは縄をからげてゆくと同じ*」ようにしてゆけばよいという。2番目の廻し竹をかけると、ほぼ底の編目はきっちりとして締ってしまう。「作業は小さいカゴを作るより、大きいカゴのほうが、かえって楽だ。慣れないと、廻し竹を途中で折ってしまうことがある*」。それさえ気をつければ、難しいところはないはずだという。

2番目の廻し竹から立竹の間隔を次第にひろげてゆくとき、左手の手首をかえすようにして、立竹をひろげながら廻し竹をからげてゆく。同時に右手でもとの目をおさえ、なるべく立竹のあいだを等しくしてゆく。この辺の手加減が素人とプロの差だという。

底を編みおわると胴編にはいる。立竹を目分量でまろく撓め、左側2本目の立竹の外側をとおして、胴のまわりのハチマキという廻し竹に端をさしこみ、端同志をからげて底まわりの台の部分をしらせる。別に立竹をかがる廻し竹を2本用意しておき、

底をヒザにあて、立竹を内側へおしたおすようにして立竹をたて、廻しをかけ、胴をこしらえる。最後に立竹の端を切りそろえ形を整えると終りとなる。

こうしてできあがったマルショウギを計ってみると、手元の標本では口の直径 22 cm・高さ 7 cm、底の直径 18 cm、重さ 70 g となっている。立竹にも廻し竹にも太さ 3 ないし 4 mm のタケがつかわれ、底は厚さ 13 mm にもなる。立竹にかかる最初の廻し竹の帯の巾は 15 mm で、この廻し竹は底の中心から 3 cm のあたりからはじまっている。2 番目の廻し竹の巾も 15 mm で、それから 3 番目の双子編状の廻し竹が 2 回かけられている。よくみると、1 番目の廻し竹と 2 番目の廻し竹とでは、どの立竹を潜り・どの立竹を飛びこえるかの関係が逆になっていることがわかる。立竹は縁のところで撓められ、カゴを真上からみた場合、むかって左側の立竹 2 本の内側を抜け、それから 2 本外側をとおり、底へとおりてゆき、ほかの立竹とからみあって切りそろえられている(附図11)。

c. どのようなカゴが作られてきたか

オカメザサを材料にしたカゴ細工には、オカモチとマルショウギの 2 つの種類がある。オカモチはマルショウギに手をつけたもので、マルショウギはクルミやクリやウメなどをいれて、干しておくのにつかうという。また、ウドンをうでるとき、ウドンの水を切るのにつかうという。昔は、どこの家にもマルショウギが 5 つや 6 つはあったものだという。無雑作につくられたようにみえるこの種のカゴも、実際につかってみれば、20年から30年はつかえるといわれている。

Ⅲ. 若干の考察

1 関東地方のタケカゴ細工は、はじめにも述べたように、たしかに、マダケを素材にしたカゴ細工の展開としておさえることができよう。しかし、そのかたわらでは、専門のカゴ屋さんたちの手によらないシノやササ・スズのカゴ細工が農閑副業として、かなり広くゆきわたっていた点もみのがせない。とくに、秩父から上越地方にかけてのササを用いたカゴ細工は、主流派のカゴ細工とはちがった面白さがあり、新しく見なおされてよいのではなからうか。

2 マダケを素材とした伝統的なカゴ細工で、第 1 に要求されるのはタケを所定の厚さと巾に剥ぐことである。「タケ剥ぎ 3 年」といって、これができればカゴ屋の仕事もひとつの関門をとったといわれるほどである。そうして作られた立竹や廻し竹をつかってつくられるのは、関東地方では、東北地方ではほとんどみられなかった(福島県下をのぞいてほとんどみられなかった)目の大きい大振りな 6 つ目カゴであり、また、厚い身竹や皮竹を借しげもなくつかった大振りのザルで、カゴ全体の形は「胴返し」という直径と深さとがほぼ等しい値をとるカゴの形がひとつの基本とな

る。また、縁仕上げは、2重巻の巻口仕上げで、この縁の作りがたくましいカゴの意匠をよびおこすひとつのポイントとなっている。

3 けれども、いっそう広い視野にたってみれば、関東地方のマダケのカゴ細工は、マダケを素材にしたカゴ細工の、もっとも北の1群とみることができる。ネマガリタケ細工をやるカゴ屋さんたちのいい方をかりれば、カゴ細工はネマガリの系列と、大竹細工おおたけさいく、すなわちマダケやモウソウのカゴ細工、それにその他のカゴ細工の3系列にわかれるという。その区分にしたがえば関東地方のカゴ細工は大竹細工のもっとも北の1群を形成しているのである。同時に関東地方は、おそらく、マダケのカゴ細工が、もっとも発展した地方ということができよう。

4 それなら、マダケのカゴ細工が、他の地方より、かえって北の関東地方で展開したのはどのような条件からなのだろうか。それにつけて思いだされるのは近世以降のこの地方の生産の足どりである。近世の関東の農業を特徴づけるのは雑穀農業だという。自給肥料にたよる収益性の低い雑穀農業を補うために、ここでは、はやくから農間余業の駄賃つけや炭焼・薪伐り・機織・糸引き・多様な工芸作物の栽培などがなされ、近世の末ともなれば養蚕がひろがり、明治前期にはマユとコメの農業へとまとめられてゆく。ことに山間地帯の養蚕は全国で1位2位を争うほどのたかまりをみせる。そこへ昭和にはいと平野部の地域では蔬菜栽培の近郊農業がさかんになりはじめる。よりこまめに掘りおこしていかなねばならないが、こうした地域の構造がその土地に根ざしたカゴの上に、カゴ細工の在り方に影響を与えないはずはない。

5 詳しくみると、ほんのわずかしか離れていない地域でも、カゴにはその地域での好みがあり、胴のすぼみ具合、廻し竹の数(結局カゴの深さ)、縁仕上げの形など、それぞれ異なる。使うひとの立場にたって、生産とのかねあいも掘りさげてみなければならぬが、「ツボまわり」という出職のカゴ屋さんたちの業態や、行商をかねたカゴ屋さんたちの商いが、このようなカゴの形の地域性を定着させるのに深くかかわりあっていたことも見逃せない。こうして、使うひとと作るひとの直接的な関係の積みかさねから、より暮らしに役立つカゴの意匠が生みだされる。

6 前回の東北地方の場合もそうだったが、昔から仕事をひきついできたカゴ屋さんたちは、よほどの好条件がないかぎり、いまでは、どこでもほとんど仕事をやめてしまっている。わたしたちが手ほどきをうけた15年前、あれほど盛んだったカゴ細工は、もう過去のものとなりつつあるといっても過言ではない。名のあるひとたちの仕事や、有名な職人たちの仕事、そして民芸店の店先きにならぶカゴには注意をむけるけれども(それもまた当然なのだが)、おそかれはやかれ、使いず的につかわれる生産のカゴなどは、影さえみえなくなりそうに思える。もう何年かしたら、明治の後半から戦後にかけての暮らしの移りゆきを具体的に示してくれるこうした遺産は完全に失われてしまうのではなからうか。

謝 辞

小文をまとめるための採訪に協力し、種々貴重なお教えを給った、群馬県利根郡月夜野町、千葉県夷隅郡大原町中央公民館、東京都町田市立博物館、埼玉県立野上青年の家、鈴木伴平、田辺善宗、田島喜代治、小宮亀蔵、大原町中央公民館の浅野祐二、町田市立博物館の畠山豊、月夜野町教育委員会の林吉平諸先生に心からお礼を申し上げたいと思う。秩父の小林茂先生、栃原嗣雄先生にも、たいへん御迷惑をおかけした。写真の調整は東京神田の写真弘社にいただいた。

文 献

町田市、町田市史編纂委員会編

1976 『町田市史』下巻 町田市。

文部省史料館

1968 『文部省史料館所蔵民族資料図版目録』第2巻 文部省史料館。

中村俊亀智

1969 「文部省史料館所蔵生活用具の研究(一)」『史料館研究紀要』第2号 文部省史料館。

大原町役場

1976 「大原町町勢要覧」 大原町。

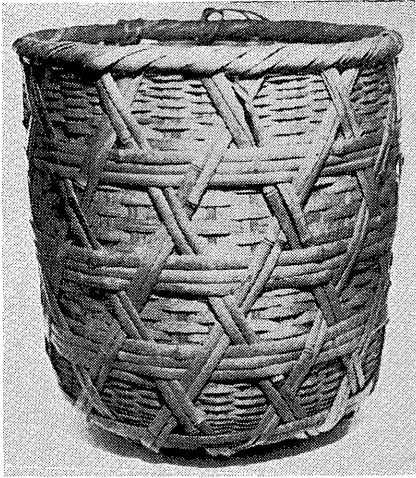
月夜野町役場

1974 「74年版つきよの」 月夜野町。

寄 居 町

1975a 「よりの1975」 寄居町。

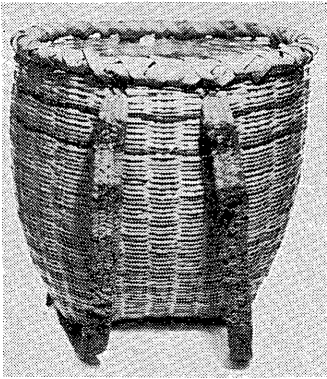
1975b 「寄居町の主要統計」 寄居町。



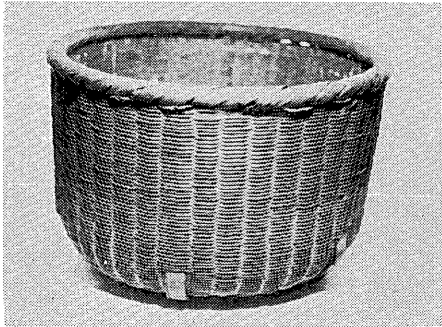
1



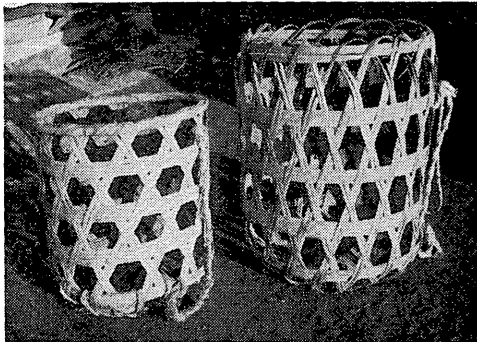
2



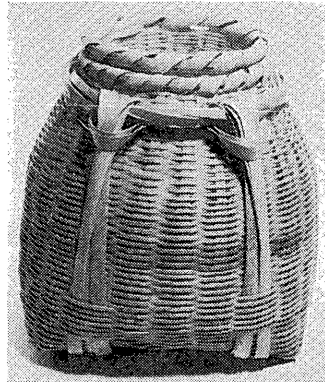
3



4

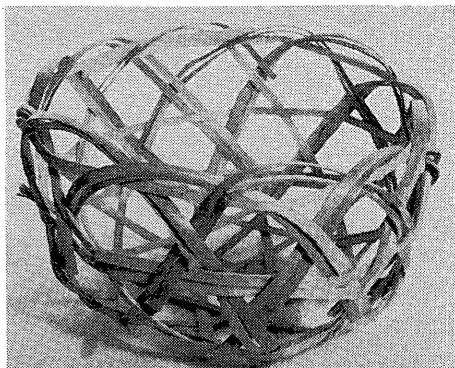


5

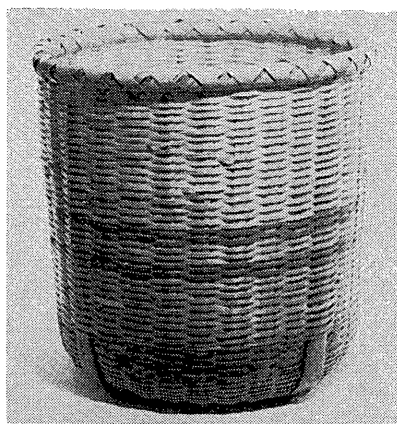


6

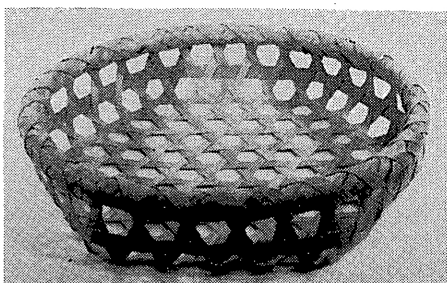
附 図 1 クレコミの背負カゴ
2 ザル目編の背負カゴ
3 ザル目編の背負カゴ
4 海苔洗いのザル
5 返し縁の背負カゴ (右) 群馬県月夜野町
6 ビク, 埼玉県寄居町



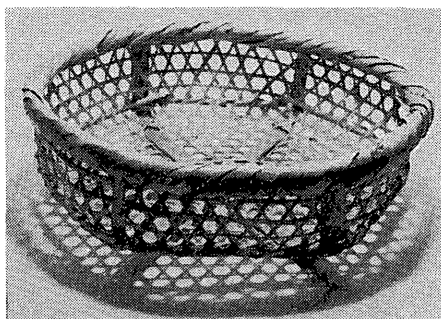
7



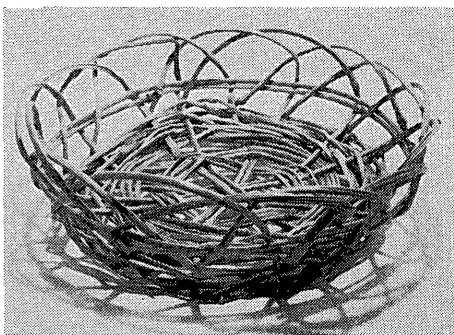
8



9



10

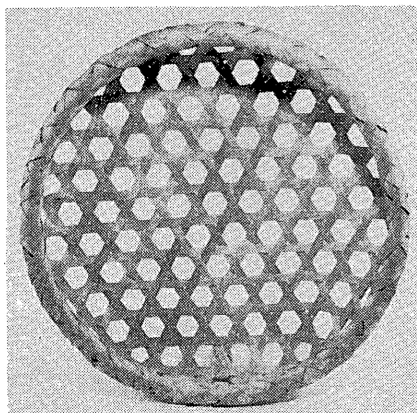


11

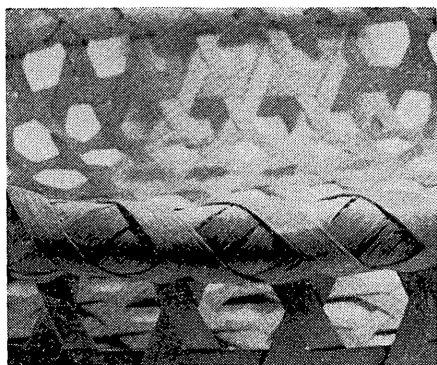


12

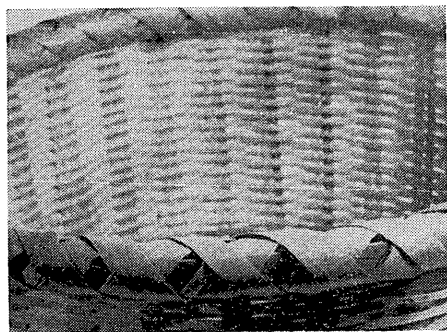
- 7 返し縁のカゴ, 群馬県月夜野町, 本文175頁参照
8 キノコトリのザル, 埼玉県寄居町, 本文183頁
9 延縄カゴ, 千葉県大原町, 本文180頁
10 メカイザル, 東京都八王子附近, 本文187頁
11 スズダケのカゴ, 埼玉県野上町, 本文188頁
12 スズダケのカゴ, 群馬県, 本文189頁



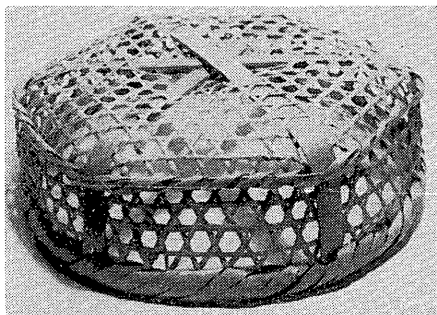
13



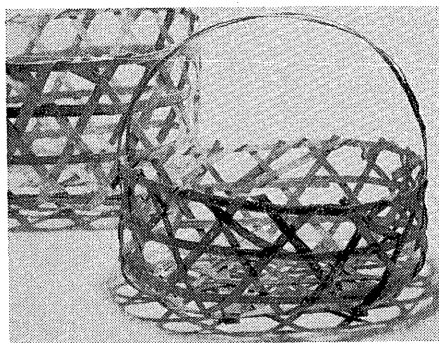
14



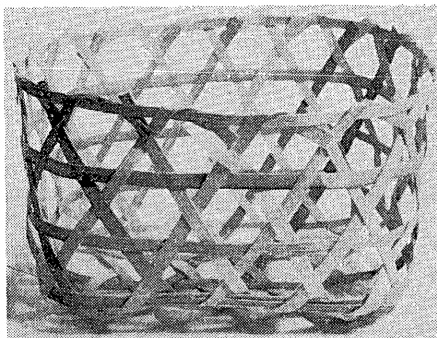
15



16

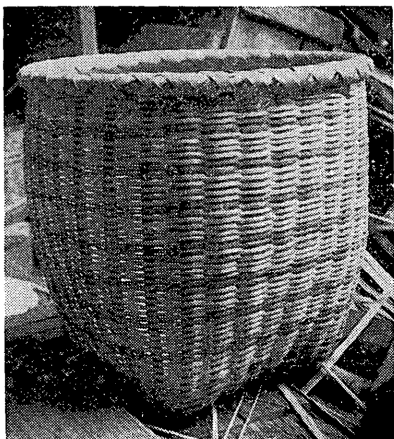


17

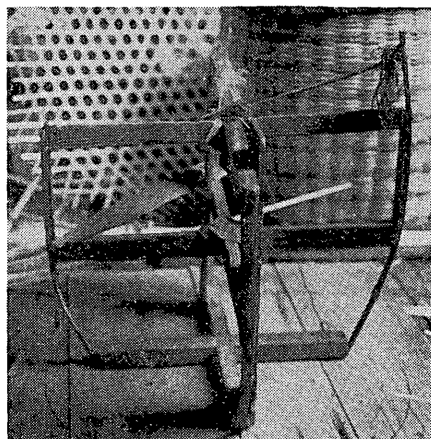


18

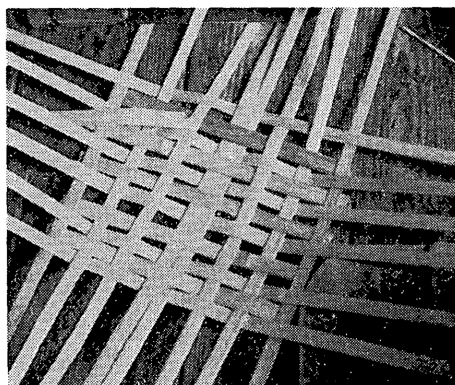
- 13 延縄カゴの底編、本文180頁参照
- 14 延縄カゴの縁編（2重巻の巻口仕上げ）
- 15 キノコトリのザルの縁編（2重巻の巻口仕上げ）
- 16 メカイカゴの底編（6つ目編、力骨いり）
- 17 6つ目カゴ、埼玉県寄居町
- 18 共縁の6つ目カゴ、埼玉県寄居町



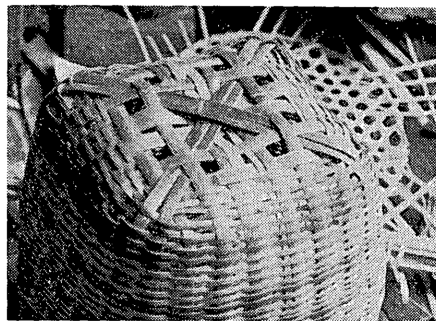
19



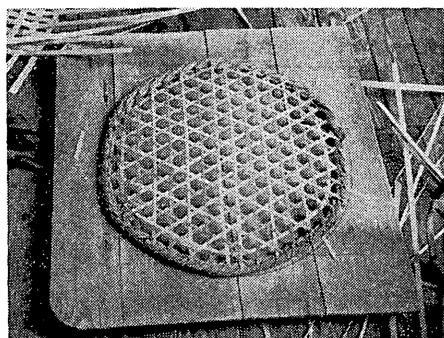
20



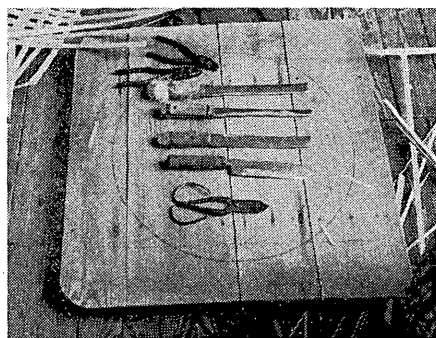
21



22



23



24

19 千葉県大原町のショイカゴ, 本文179頁参照

20 同ショイカゴの底作りの枠, 同上

21 同ショイカゴの底編の中心部, 同上

22 同ショイカゴの底編, 本文179頁参照

23 延縄ザル, 同上

24 カゴ細工の道具, 千葉県大原町, 同上